



サンダークラップス! リボーン

THUNDER CLAPSI REBORN

マイティナース

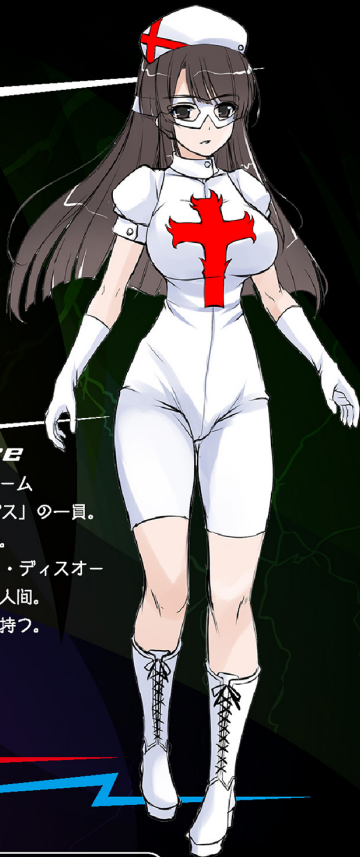
試し読み版

羽沢向一
挿絵：緑木邑

マイティナース

Mighty nurse

清楚な雰囲気の子大生。近しい人以外には自らがオフビートであることは隠している。スーパーヒーローに憧るつもりもなかったが、能力を使って人助けをしたことをきっかけに「マイティナース」として活動を始める。



フラア

Flare

スーパーヒーローチーム「サンダークラップス」の一員。凛とした力強い美女。悪の科学者ドクター・ディスオーダーに創られた人造人間。頑強な肉体と怪力を持つ。



Attention

レプティルホール

Reptilehole

爬虫類をモチーフとする
犯罪組織。

サンダークラップス! リボン
CHARACTERS *マイティナース*

Contents

第一章

マイティナース
誕生 004

第二章

はじめての
ヴィランとの闘い
028

第三章

黄金に輝く
処女陵辱
047

第四章

古き蛇の毒く
淫魔術 090

第五章

ヒーローたちよ、
イキ狂って
産卵せよ！
120

エピソード1

真相 171

エピソード2

真実 178



スターサンダー

Star thunder

「サンダークラップス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血の
ミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

ローズデバイス

Rose device

「サンダークラップス」の一員。清楚可憐で
色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷
を負い、体内にナノマシンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着して闘う。



オセロット

Ocelot

「サンダークラップス」の一員。猫科
の猛獣の雰囲気を持つ陽気な美女。
南米の自然の精霊たちには認められ
たシャーマンで、精霊の力を宿してジャ
ガーの獣人に変身して魔法を使う。

第一章 マイテイナース誕生

オブビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンD.C.へ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身で宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、宇宙からもどつてくると、集まった記者たちへほがらかに笑って、僕は子供のころから『超調子^{スリバ}つばずれ^{オブビート}』と呼ばれていた、と語った。

それからスーパオブビートは鮮やかな赤いコスチュームをまとい、赤いケープをひるがえして、倒れかかったビルを持ち上げ、墜落する飛行機を支え、海底に沈んだ潜水艇を引き上げた。

さらに多数の犯罪者と闘い、ギャングが放った銃弾の雨も砲弾も胸板で跳ね返し、テロリストが仕掛けた猛火にも冷凍にも耐えて、悪党を逮捕して法の裁きのもとへ送った。

最初に世に現れた超人スーパオブビートに刺激されたのか、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。

彼らは生まれついで超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物、はては異星人に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

オフビートたちの多くの者が、特別な能力を大小様々な犯罪に悪用した。

別のオフビートたちは、始祖スーパーオフビートにならって、犯罪と闘い、事故から人々を助け、天災から人々を救うスーパーヒーローとして活躍している。

しかし大多数のオフビートたちは、家族や近い人々だけに自分の超能力を明かして、ごく普通の人間として生活している。

今咲流奈もそういう平凡なオフビートのひとりだった。

流奈はマンシヨンの自室の壁にある姿見に、自分の全身を映した。

十八歳。大学一年生。身長は一六五センチ。

色白の肌に浮かぶ顔は、どこか昭和の美人女優が演じるお嬢様という雰囲気だ。背中に流れる長いストレートの黒髪も、やはりいまどきではない。

長方形の鏡に映る長身は、純白のナースの制服を着ている。本物の制服ではなく、パーティーグッズショップのネット通販で買ったコスプレ衣装で、実際にはありえない膝上のミニスカートだ。

白衣の胸を押し上げるバストはDカップ。背が高く、手足がすらりと長いので、華奢な印象だが、半袖とミニスカートから伸びる腕も脚も女らしいまろやかさがある。

頭には、今ではほとんど使用されなくなった白いナースキャップが載っている。

両足にはおろしたてのかわいい白いパンプス。本物のナースはもつと仕事用の靴を履いているが、仮装だから気にしない。

流奈は両手の指で膝上のスカートの裾をつまんで、首をかしげた。

「ねえ。やつぱりスカートが短すぎないかなあ？」

流奈の問いに応えて、鏡にもうひとりのミニスカナースコスプレが現れた。流奈とは対照的に小柄で丸顔のナースは高橋佳衣。流奈の幼なじみで、今も同じマンションに住み、同じ大学に通っている。

「このミニスカがいいんじゃない。ハロウインの仮装なんだから。それに下はショーツじゃなくて短パンなんだし」

流奈の白衣のスカートが、佳衣の両手に握られた。

「うひゃ！」

とっさにスカートを押さえようとしたが、佳衣のほうが素早い。スカートが高々とまくり上げられて、中の下半身を全開にされてしまう。

現れたのは、スポーツ用のショートパンツ。こんな派手なスカートまくりを外でされたら大騒ぎするところだが、同じ仮装の親友と二人きりなので、鏡に映るあられもない自分の姿をじっくりとながめることにする。

「うーん、まあ、このミニスカートもありかな」

「でしょ。今年のハロウィンこそ、渋谷のスクランブル交差点にくりだすぞ！ 死デッドリの看護師二人組が東京もんにぶちくらわしたるけん、覚悟するつぺよッ！」

「それ、どこの方言なの？」

「大都会に憧れる地方都市弁だべっちゃ」

「あははは」

流奈と佳衣が住んでいるのは、東京や京都から離れた日本の中央の県。県庁所在地である長本市内のマンションだ。

今日は流奈の部屋で、ハロウィンに渋谷へ行くために着る衣装を作っている。といっても今はまだ八月二十日。本番の十月末には二か月以上あるが、それまでにしっかりと仮装の調整をする計画だ。

二人は並んでミニスカナース姿でいろいろポーズを取り、自分と相手を見比べた。

「そうだ。流奈、この針金を切って」

いろいろな道具や材料がごちゃごちゃと置かれたテーブルの上から、佳衣が太い針金をつかみ取って、流奈へ差し出した。針金の先端から三十センチごとに、赤いサインペンで印がつけてある。

「ここんところだね」

「OK」

流奈は針金を受け取ると、顔の前に近づけた。

針金が顔から十センチほどの位置に来ると、口を小さく開いた。

とくに意識を集中しないで、すうつと息を吸う。

口の前に、小さな赤い炎が現れる。太い蝋燭ろうそくに灯るくらいサイズの炎だ。

口の中から炎を噴き出しているのではない。口を開けて、火をイメージすると、口の前に炎が出現するのだ。流奈本人にも理屈はわからないが、ものごころがついたときには自分はそのができるとわかっていた、生まれつきのオフビート能力だ。自分はいわゆるミュータントだと考えている。

炎は自由に操ることができる。思うがままに炎の色を赤から青へ変えて、強く輝かせた。形も楕円形から細くとがらせて、長さが十五センチの刃と化す。

青い炎の刃を針金に触れさせると、映画で見るレーザーのように針金があっさりと切断

された。そうして次々と針金を同じ長さに切り落とすように、ひとりごに炎が消える。

流奈は口を閉じた。スイッチを切ったように、ひとりごに炎が消える。

焼き切った針金の先端を指でつまむと、思った通り熱くない。金属本来の冷たさを感じる。これもまた理屈はわからないが、流奈の炎に燃やされたり、溶かされたり、焼き切られたものには熱が残らない。わかっているも他人に渡す前には、念のために自分で温度を確認している。

流奈と佳衣は針金をペンチで曲げて、アクセサリーを作っていく。

「いつ見ても便利よね。流奈の炎は」

「父さんと母さんと佳衣以外の人前では使えないんだから、使い道がないよ。せいぜい自分の部屋でマッチの代わりに使うだけね。このマンションはキッチンがオール電化だから、料理にも使わないし」

「もったいないなあ。流奈はスーパーヒーローになりたいと思わない？ 東京へ行けば、ヒーローの誰かに会えるかもよ」

「わたしにヒーローなんて無理よ」

「流奈は口の火だけじゃなくて、身体も頑丈で、力も強いのに、いつも普通のふりをしてるでしょ。たまには腕力を思いっきりふるってみたいと思わない？」

「ゼーん然。わたしはきちんと大学を卒業して、できれば日本文学に関わる仕事に就きたいの」

流奈たちが作業しているリビングルームには、壁に沿って本棚がいくつもあり、日本の古典から現代まで文学書と研究書が整列している。ある意味女子大生とは思えない部屋だ。「わたしはなりたくてオブビートになったわけじゃないもの。たまたま力を持って生まれたミュータントだからって、それで人生を決められたくない」

「わかったわかった。じゃあ包帯にチャレンジね。流奈、座ったまま、じっとしていて」
佳衣がテーブルに置いた白い包帯を持って、床に横座りする流奈の前にまわった。

「ナースの叔母さん直伝の包帯さばきを、ついに見せるときが来た。さあ、ご覧に入れよう」

アニメのキャラクターみたいな声を出して、佳衣の両手が流奈の顔に包帯を巻いていく。自分の言葉通り、プロ並みの手際で親友の顔全体にきっちり包帯を巻いていく。

「口から火を出すより、こういう技を欲しかったな」

「そうかなあ。ほい、完成！ さあ、どうよ」

佳衣に引っぱられて、流奈は再び姿見へ向けられた。鏡に映る自分は、長い髪を外に出したままで、顔をすべて包帯に隠されている。ただ左右の眼だけが包帯の隙間から覗く。

映画で見る透明人間かミイラ怪人と化したミニスカ白衣のナースだ。

「すごい！ 本当に包帯を巻くのが上手いのね。ああ、われながら不気味」

「ハロウィンにぴったりでしょ。これで包帯に血糊をにじませておけば完璧ね」

そのとき、流奈と佳衣の鼓膜を轟音が叩いた。

窓の外から、連続してなにかが壊れる音と悲鳴が聞こえてくる。

「なに!？」

「事故!？」

二人並んで窓から身を乗り出す。流奈の部屋は二階で、窓の下には道路と歩道がある。道路を挟んでマンションの向かい側の歩道に、大きな看板が落ちていた。向かいの十階建てのビルの屋上に設置されているはずの、市内にある大手不動産屋の看板だ。たまに目に入ったときは、さして大きいとは感じなかったが、歩道にあると重機を使わなければ動かせないサイズだとわかる。

その大看板に、女が下敷きになっていた。看板の裏側を支える鉄骨の一本が、女の右脚の太腿に乗っている。今のところ命の危険はないようだが、ショックで目を大きく見開いたまま、マネキンのように硬直していた。

数人の男が看板のあちこちに手をかけて、太腿の上から持ち上げようとしているが、重

量のせいでびくともしない。

流奈は今まで、人の身に危険がおよぶ事故現場に直面した経験がなかった。しかしニュースで事件事故を見るたびに、自分ならどうしていただろう、と思索した。自分が秘密にしているオフビートの能力を人々に明かしてでも救助できるだろうか、と何度も考えてきた。

現実に救助を必要としている人を目の当たりしたときに、気がつくのと三階の窓から飛び出していた。子供のころからの経験で、自分の身体はこのくらいの高さなら平気で降り立るとわかっている。

幸いにも道路の人々の視線は看板の下の女に集中していて、流奈がどこから現れたのかは誰にも気づかれなかった。ただ顔を白い包帯でグルグル巻きにしたミニスカ白衣のナー스가、いきなり背後から人々を押しつけて進み出たことに仰天している。

「すみません。どいてください。わたしはオフビートです。わたしが助けます」

生まれてはじめて知らない人たちの前でオフビートと名乗りながら、流奈は看板の下敷きになっている女の前に膝をついた。鉄骨の状況を判断して、包帯の内側で口を開き、布越しに空気を吸う。

（できる！ わたしはできる！ 完璧に炎を操って、この女の人を助けられる！）

佳衣には使い道がないと言ったが、流奈は炎をコントロールする練習をずつとつづけてきた。今まで炎を人や動物に向けたことはないが、自分の能力が簡単に生き物を殺傷できるとわかっている。だからこそ完全に制御する責任がある。

（助けるっ！）

口の前の包帯を燃やして、赤い炎が延びた。炎は色を青白に変えながら、細いロープのように長くなっていく。周囲の人々から驚愕きょうがくの声が上がった。

太腿を押しつぶす鉄骨を両手で握ると、炎の刃を慎重かつ速く動かして、太腿の左右の二か所の鉄骨に触れさせる。熱したナイフでバターを切るように、鋼鉄が切断された。予想した通り鉄骨を切り離しても、他の鉄骨が看板を支えている。

男たちが女の身体を引っぱって、右脚を看板の下から抜いた。

その直後、上からコンクリートの大きな塊が落下して、看板に激突した。ハッと見て見上げると、看板が設置されていたビルの屋上から、一台の乗用車の白い車体がコンクリートの扉を突き崩してはみ出している。屋上の駐車場の車が暴走して、看板に激突したらしい。

「手が！」

運転席の窓から、腕が力なく垂れ下がっている。運転手は意識がないようだ。

（あの人も助けないと、ああっ！）

乗用車がガクンと揺れて、さらに前へ出て傾いた。流奈の周囲から悲鳴がいくつも上がり、危険を感じた人々が走って逃げていく。流奈の目にも、今にも墜落しそうに映った。

（今すぐ屋上へ行かないと、間に合わないっ！）

強く願った直後、流奈は自分の身体が空中にあることに気づいた。視界が一気に下へ向かって流れ、目の前に白い乗用車がある。

「な、なに!!」

反射的に顔を背後へ向けると、自分の背後の空気が揺らいでいる。白衣の背中から左右に陽炎かげろうが広がっていた。

「飛んでる!! わたし、空に浮いてる!! これもわたしの能力なの? あああ、そんなことを考えてる場合じゃない!」

両手を前に出し、バンパーを下からすくい上げるようにつかんだ。車体の重量が両腕にかかる。この重さははじめての体験ではない。高校生のときに自分の腕力を確かめたくて、父の軽トラックを持ち上げたことがあった。

佳衣が言ったように、流奈は普通の人間よりも力が強い。普段は意識して筋力を常識的な女の子並みに抑えているのではなく、必要なときに筋力を強くできるという感覚だった。

父親から『ギアを上げたみたいだ』と言われたので、自分でも『身体のギアを上げる』と表現している。

自動車を屋上へ押しもどすことをイメージすると、空中に浮かぶ身体が前へ移動する。そのまま車体を完全に屋上へ上げて、安全な中央部まで押し移動させた。

運転席を見ると、中年男がハンドルにつつぷして、ピクリとも動かない。ドアの外に出ている右腕の脈を取ると、幸いにも生きている。

胸をなでおろしていると、パトカーと救急車のサイレンが聞こえた。すぐに屋上の鉄扉が開いて、救急隊員と制服の警察官がわらわらと姿を現す。

救命士が乗用車のドアを開けて、運転手を担架に横たわらせる。

警察官が流奈に近づいてきて質問した。

「はじめて見るが、あなたはいわゆるスーパーヒーローなのか。名前は」

「すみません。失礼します！」

流奈は上ずった声をほとばしらせて、屋上から一気に青空へ上昇した。

道路にいる人々がスマホのカメラを、上空へ向けてくる。

（うわ！撮られてる！）

それだけではない。誰が飛ばしたのか、二機のドローンが下から流奈に近づいてきた。

（ドローンにカメラが付いてる！ ていうか、スカートの中を撮影されてるうっ！）
流奈もネットの動画で、うっかり目にしてしまったことがあった。女性スーパードロ
ンをローアングルで撮影したエッチな映像を。

「ひいっ！ 逃げなくちゃ！」

もっと速く飛ぶ、と意識した途端、顔に猛烈な突風が吹きつける。

（ああっ、すごい風！ じゃない。わたしのスピードが上がってる！）

追いつがってくる二機のドローンが後ろに置き去りにされ、眼下の市街が録画を倍速で
見ているように流れていく。強い風圧が顔にぶつかっても、とくに息苦しさはなかった。
頭の後ろで長い髪が盛大に乱れるのが、身体への唯一の影響だろうか。

「飛んでる！ 本当に空を飛んでる！ わたし、飛んでるっ！」

あらためて背後に目をやると、翼のように広がった陽炎が、翼のように羽ばたいている。
その動きはゆっくりとしたもので、とても高速で飛べる推進力を出しているとは見えない。
それなのに流奈の身体は加速していく。

（このまま飛びつづけるのもまずいかも）

そう思うと、ピタリと空中で静止した。身体が軽く前にガクンとなったが、それ以外の
衝撃はない。空中に立ったまま、おそるおそる指先で背中に触れてみると、本物の陽炎同

様に実体といえるものはない。指がナース衣装の布に当たる。

(ナース服は破れてない。服を突き破って、身体から出てるわけじゃないのね。よかった。空を飛ぶたびに服が破れるのじゃなくて。それじゃあ方向を変えるときは……)

動物番組で見たハヤブサが空中で一回転する映像を思い浮かべた。途端に陽炎が揺らぎ、形を変える。流奈の身体が孤を描いて上昇する。

「うわあっ！」

ハヤブサというよりも遊園地のループコースターに、自分になった気がする。気がつくのと二度三度と空中に円を描いていた。さらに頭の中で稲妻を想像すると、ジグザグに動きながら宙返りできた。

「本当に自由自在に飛べる！」

つい歓声を上げると、足下から喧騒が聞こえた。いつの間にか十人あまりの人々が立ち止まって、流奈を見上げている。

「さっきのことがニュースになってるのかな。ナースの仮装で町の中に降りたら、もっと人が集まってきそう。仮装のままでマンションに帰るわけにいかないし……」

とりあえずの打開策として頭に浮かんだのは、市街を離れることだった。再び加速して、郊外に見える山々へ向かって飛んだ。長本市は県内では最も大きな市だが、中心を離れ

ば農地が広がり、山脈の裾野が迫っている。

「山の中に入って、佳衣に連絡して。あつ、スマホ持ってない！ あああ、財布も持ってないよ！」

自宅にいるときはスマホと財布はテーブルに置いておくのが、流奈の習慣だ。ないとわかっていても、両手でナース衣装のポケットをまさぐってみるが、入っているわけがない。「どこかで電話を借らないと。あ、交番！」

眼下に農村が見える。まばらな家の集まりの間に、交番の建物があり、制服警官が外を歩いている。交番から数百メートルほど離れたところから森がはじまっていた。

森の上へ向かって移動しようと考えると、ひとりで背中から広がる陽炎が揺らめいて、まっすぐ飛んでいた流奈の身体がカーブをきった。森の上から樹々の隙間へ降りて、地面に着地すると、顔に巻いた包帯をほどき、頭のナースキャップをはずして、ミニスカワンピースを脱いだ。幸い、下には白いスポーツシャツとショートパンツを着ている。場違いかもしれないが、気にはいられない。

ナースの仮装一式を木の枝に結びつけて、森から出ると、交番へ向かった。警官にスマホと財布を落としたと説明して、固定電話から佳衣のスマホにかけさせてもらった。

「もし」

と、もしもしを言い終わる前に、受話器から佳衣の爆発的な声が轟いた。

「流奈。えらいことになってるよ！ さっきからテレビのローカルニュースで『未知の看護師』のことばかり！」

「アンノウンナース？ なんなの、それ？」

「流奈のことに決まってるよ！ スマホやドローンで撮影した流奈の映像がずっと放送されてる。撮影している人の『アンノウンナースだ』と言ってる声が入ってて、そのまま流奈の呼び名になったの。二次大戦のヨーロッパで、包帯で顔を隠したナースがあちこちの戦場に現れて、戦争に巻きこまれた一般人の救助をしたっていう『アンノウンナース伝説』があるんだって」

「その話は後でするから」

「流奈が空を飛べるって知らなかったよ。どうして教えてくれなかったの？」

「今日、生まれてはじめて飛んだんだから。自分が驚いてる」

「そんなことがあるんだ」

「早く迎えに来て！」

「わかったわかった」

佳衣は交番の前までタクシーで来てくれた。

森の中のナース衣装を回収してからタクシーの後部席に乗ると、佳衣が愛用のタブレッツトでニュースを見せてくれた。無我夢中でやった人命救助の姿が、様々な構図で撮影されている。『ナースだ』『ヒーローか』『はじめて見た』と様々な声が聞こえて、なんだかたまらなく恥ずかしい。

そして本当にアンノウンナースと呼ばれている。テレビでよく見るアナウンサーもコメントーターもタレントもそう呼んでいる。

スーパーヒーローウォッチャーなる肩書の人物が、うきうきした表情で解説もしていた。『今日、長本市に現れたアンノウンナースは、コスチュームやオフビート能力から見て、今まで一度も活動の記録のないヒーローです。私は新たなスーパーヒーローの登場を大いに歓迎しますよ』

その後、アンノウンナースという呼び名がついた理由が語られた。二次大戦のヨーロッパで大勢の人々が命を助けられながら、写真や映像には残らないという、顔を包帯で隠した神出鬼没のナース。かつては心霊の類と思われていたが、オフビートの存在が知られて

からは、スーパーオフビートのデビュー以前に秘かに活動したスーパーヒーローたちのひとりだとも考えられているという。そして二次大戦が終わるとともに、アンノウンナースは現れなくなった。

マンションの自室にもどった流奈は、バスルームでシャワーを浴びながら告げた。

「アンノウンナースなんて全然知らなかった」

バスルームのドアの前に立つ佳衣が応える。

「まあ、ヨーロッパの戦争秘話みたいなものだし、ググっても日本では戦史マニアしか知らないみたいよ。ホラーキャラのつもりで、包帯で顔を隠したナースの仮装を考えたのにビックリだよ。下手したら著作権侵害になっちゃうかも。で、流奈はこれからどうするの」

「どうするって、どういうこと？」

「もちろんスーパーヒーローデビューした流奈は、これからどういうヒーロー活動をするのか、ということよ」

ガラス戸を勢いよく開けて、流奈は濡れた顔を出した。

「スーパーヒーローはやらない！」

「ええー、残念。アンノウンナースとは違う別のコスチュームとヒーローネームを考えたのに」

佳衣は目を輝かせて、ニンマリと笑って、流奈を見つめた。

「どんなのか、知りたいでしょ」

☆

長本市で起きたビル火災は、救助活動が滞っていた。炎に追われて屋上へ逃げた人々に、梯子車がとどかない。

消防隊の隊長はいくつもの窓から炎を噴き上げるビルを見上げて、齒噛みしながら救出方法を懸命に考えている。

ふいに、背中をつつかれた。ふりかえると、黒髪の頭に白いナースキャップを載せて、顔の上半分を隠す白いアイマスクをつけた若い女がいた。

着ているのは身体にびったりとした白い服。半袖のシャツと膝上までの丈のスパッツが一体化したような衣装だ。

ふくらんだ胸の中心には、炎を上げる赤い十字の模様がある。

両足には白い頑丈そうなブーツ。

奇妙なコスチュームの女は、火事場の喧騒に負けない大声で話しかけた。

「あの、すみません。わたしは空を飛べます。お手伝いできることはありますか」

隊長はスーパヒーローに会ったことはなかった。超常の正義の味方たちはニュースの向こうの存在だ。それでも瞬時に理解した。

「頼む。まだ何人も屋上に閉じこめられている。救助してくれ！」

「あの、梯子車のゴンドラをはずしてもいいですか」

「かまわない。あのゴンドラを使ってくれ」

隊長が梯子車から伸びるゴンドラのひとつを指さした。

「はい！」

流奈は背中から陽炎を広げた。練習で自由に陽炎を出したり消したりできるようになった。空中の移動も思った通り。すぐさまゴンドラのそばに上昇して、両手で梯子をしつかりと握ると、ゴンドラに乗っている消防士に声をかけた。

「隊長さんの許可をもらいました。ゴンドラをお借りします」

「えっ!？」

驚く消防士にまじまじと見つめられる前で、流奈は口を開き、青い炎の刃をふるって、梯子を切断する。両腕に大きな重量がかかるが、流奈の身体は空中に浮いたまま。まだまだ余裕を感じる。もっと重いものを持ち上げられるだろう。肉体のギアを上げた状態だと、

どれだけの腕力を出せるのか、自分でも推し量れない。

消防士を乗せたゴンドラを持って、ビルの壁面に沿って、炎を避けながら上昇する。たちまち屋上に出ると、ゴンドラを置いて、声を上げた。

「みなさん、助けに来ました！ わたしのことには知らないと思いますが、ちょっと前にニユースでアンノウンナースと呼ばれた新人ヒーローです。ゴンドラに乗ってください！」
屋上には五人の男女がいた。全員がサラリーマンとOL。突然のことにとまどっていたが、消防士にうながされて、ゴンドラに駆けこんだ。

五人全員がゴンドラに乗ると、流奈は合計六人分の体重をもともしないで屋上から飛翔した。

五人が今にも墜落しそうに感じて、口々に悲鳴を上げるなか、流奈は慎重にゴンドラを道路へ着地させた。救命隊員が駆け寄り、五人の体調を診はじめる。

流奈は安堵の息をつく間もなく、隊長に呼ばれた。

「別の階にも逃げ遅れた人がいる。救助してほしい」

消防士が使用しているトランシーバーのポーチを手渡された。流奈はポーチを腰に巻くと、再び背中の陽炎を広げて飛び立った。

ビルが鎮火すると、流奈はわざと目につくように飛んで、じゃまにならないように火災

現場から離れた公園に降りた。たちまち追いかけてきたマスコミとスマホをかまえた野次馬に包囲される。

矢継ぎ早に飛んでくる質問の声に抗って、大きな声を上げる。

「わたしは前にアンノウンナースと呼ばれたオフビートです。あときはたまたまハロウインの仮装の準備をしているときに、事故を知って飛び出しました。ですから伝説のアンノウンナースとわたしは全然関係がありません」

とりかこむ人の輪のあちこちから失望の声が聞こえた。流奈と佳衣が見たツイッターや匿名掲示板には、長本市のアンノウンナースが本物ならば二次大戦の話が聞ける、と期待するマニアの論調もあった。

「あれからいろいろ考えて、あらためてヒーロー活動をしたいと思います。これからはマイティナースと呼んでください」

マイティナースというヒーローネームを提案したのは佳衣だった。流奈は『単純すぎないかな』と言ったが、佳衣は『近ごろのヒーローネームは考えすぎなのよ。日本の元祖ヒーローのキャプテン・スカイヤ、サンダークラップスのスターサンダーを見習うべきよ』と主張されて、押しきられてしまった。

マイティナースという名前にどんな反応があるかと内心ドキドキして待っていると、拍

手が湧き起こった。ホッと息をついて、言葉をつづけた。

「あの、わたしは犯罪者と闘うことはできません。事故や災害の救助だけを専門にします」
記者のひとりから質問が飛んできた。

「その白地の胸に燃える十字の新コスチュームは、サンダークラブスのフレアに似ているようですが、フレアとは関係があるのですか？」

サンダークラブスは東京で活動する比較的新しいスーパーヒーローチーム。女性四人のチームで、フレアはその一員だ。空を飛び、おそらく日本のヒーローたちのなかでも有数の剛力を誇る。

フレアのコスチュームは、白いミニスカートのワンピースで、胸には『太陽閃光』のヒーローネームにふさわしく黄色い太陽をデザインしたシンボルマークを描いている。

今着ているコスチュームも、流奈と佳衣の共同のお手製だ。胸の炎の十字は流奈のアイデア。

「わたしはサンダークラブスに直接会ったことはありませんが、ニュースで活躍は見えます。このコスチュームはフレアたちへのあこがれの表れです」

人の壁の奥から下卑た男の声が上がった。

「『月刊ヒーローピンクマガジン』の者です。フレアといえば、ちよつと前にフレアのエ

口の中継があったけど、うわ、離せ、なにをする、うぐっ！」

記者の周囲の人々が『いいかげんにしろ！』と怒鳴り、口をふさぎ、羽交い絞めにしてどこかへ連れて行った。

新米スーパーヒーローは安堵の息をついた。

肉体の一部だけは蠢いた。二本の黒い肉棒が長さを伸ばしている。太さは変わらないが、長さは一メートル近くになり、亀頭をもたげてグネグネと左右にくねる。有名なインドの蛇使いが踊らせるコブラのようだ。つるりとした亀頭に目や口がないのが、かえって不思議に感じる。

暗黒のペニスがひとしきり踊った後に、二つの亀頭がマイティナーズの上半身に迫ってくる。コスチュームのDカップの胸の先端に、亀頭がちよこんと触れて、また離れた。

それだけでコスチュームの薄い布に、溶けるように小さな穴が開いた。エンシエントポイズンの魔力のなせる業わざなのか、それとも敵が作ったコスチュームがそういう仕組みになっていたのか、二つの穴から魔毒によつて強制的に屹立させられた乳首と乳輪周辺だけが現れる。

コスチュームを大きく破られてバストを全開させられるよりも、乳房の先端だけを外に露出させられる姿は、自分自身の目にもひどく卑猥に映った。

(こんなに大きくなってる！)

コスチュームの上から勃起しているのはわかっていたが、素肌の肉筒を目の当たりにすると、いつそう大きく膨張していると感じる。

黒い男根が同時に動いた。左右の乳首に亀頭が押しつけられ、指先で撚るように強くこ

すりたてられる。

「ひあああっ！ はううううっ！」

それだけで胸全体が蕩けるような快感が炸裂した。押しつけられる亀頭は冷たく、乳首と乳房の内側は冷えたままなのに、神経に熱いパルスが走り、脳の快感中枢が沸騰する。恥ずかしい屈服の言葉を聞かせたくないなどと考える前に、マイティナーズは口走っていた。

「気持ちいい！ 乳首が気持ちいいのう！」

自分の歓声を聞いて、はじめて自分が恥知らずなことを大声で発していると知った。知っても口を閉じることはできず、後から後から喉の中を喜悦の言葉が噴き上がってくる。

「はひいいいん！ 乳首が！ 乳首が溶けちゃう！ 気持ちよくて溶けるう！」

高くしこり勃っているピンクの肉筒が、亀頭に圧迫されて倒される。さらに押す力が強くなり、乳首が乳房に埋められる。Dカップの乳房全体がひしゃげて、二つのカルデラが並んだようになった。

「あおんっ！」

亀頭の押す力がゆるむと、乳首は自らの勃起力で屹立する。くぼんだ乳房も形をもどした。しかしまた乳首に圧力を加えられて、今度は別の方向に押し倒される。また胸がへこ

まされた。

「はひいっ！」

乳首が亀頭に押し倒され、勃ち上がらされ、また別方向に倒される異常すぎる愛撫が連続する。圧迫された乳肉も縦横無尽に形を歪ませられる。上下左右に倒されるたびに、二つの凍える肉筒からあふれる乳悦の電撃が大きくなり、対照的に脳がグツグツと泡立つ。今にも乳首や耳から、何かいやらしいものがあふれ出そうな気がしてならない。

「溶ける！ 蕩ける！ あっはああ、気持ちよすぎるううん！ ああああ、まさか、このまま胸だけでイッちゃうの!!」

回数は少ないが、自慰でイクという感覚は知っている。イクという簡便な表現は、高校生のように友人の会話でなんとなく知った。しかし胸を愛撫するだけでイッた経験はなかった。いつもはクリトリスをそつとこすつて絶頂を迎えていたのだ。友人たちとの女だけのおしゃべりでも、胸だけでイケたという話は出たことがない。

「あひいい！ ありえない！ 胸を責められてるだけなのに！ あっ、あっおとおおお！ イヤ！ ダメッ！ 絶対にあるはずが、おっおおおおおお——おとおおおおう、イクッ!!」

目の前に蛇の顔がある。細い瞳が心を見透かすように見つめてくる。それがわかってい

てもエクスタシーを長々と訴える言葉を止められない。

「ひいいい、胸でえっ、あああつ、乳首でイッちゃううううううう

—— ツツ!! ——

マイティナースの叫び声に満足したように、二つの亀頭が胸から離れる。解放された乳首がまた高く勃ち上がり、絶頂前と変わらない威容を示す。押しつぶされていた乳肉も、自由になった反動で大きく弾み、元のDカップを回復する。最後の動きがまた新たな歓喜を生み、絶頂の後押しをした。

「はうううっ！ イクうっ!!」

叫んだままだらしなく開いた唇の端から、とろとろと涎が垂れた。唾液が白いコスチュームの胸に染みこみ、まだらな模様を描く。

胸を犯していた黒い男根の一本が、マイティナースの下半身へと潜った。股間に入った亀頭がコスチュームに触れると、また穴が開き、その内側にあるものを外気にさらす。

スーパードヒーローの肛門だ。

可憐にして繊細な皺が、中心から放射状に広がって、愛らしい花の蕾つぼみに見える。

「そっ、そこはダメッ!」

肛門性交についての知識はある。同意の上なら悪いことだとは考えていない。しかし自

分が肛門に異物を受け入れるなど、イメージすらしたこともなかった。今度こそ凄惨な辱めから逃れようと身悶えるが、手足の生きた拘束がズルズルと蠢くばかりで、どうにもできない。

すぼまったままの肛門に、黒い亀頭の先端が押しつけられた。またマイティナースは何度も感じたことを口にしてしまう。

「冷たいっ！」

毒に冷やされた局部に触れる男根は、より温度が低い。通常の性行為の燃える情熱とは正反対だ。強くすぼまり、懸命に抵抗する肛門が強引に押し広げられて、ズブリとオス蛇の凶器を打ちこまれる。

苦痛を予感していた。本来排泄のためだけの尻の器官に、無理やりに太く長いモノを突き入れられるのだ。痛いのが当然のはず。

「きゃおおおおおうう！」

絶叫は新たな苦痛の表明ではない。はじめて蹂躪される肛門が、強烈な快感を次々と爆発させている。

「そ、そんな!? はっああああ、どうして」

予期せぬ快楽と、快楽ゆえの戦慄に引きつるマイティナースの頬を、二又の舌がチロチ

口と舐めまわす。黄色い眼球が傲慢な目線を向けてくる。

「気持ちよくてたまらぬのであろう。我が媚毒が、マイティナースススススの感覚を造り替えたのじゃ。もはや、胸も、前の穴も、後ろの穴も、なにをされても肉の悦楽に酔い痴れるのみと知れ」

「そんな、あつああああ！」

尻の中に亀頭を挿入した男根が、蛇行してヌルヌルと進み、奥へと入ってくる。妖しい猛毒で快楽の発生殖器にされた腸の粘膜を、右に左にうねって刺激されると、ビリッビリツとめくるめく火花が咲いた。

「ひっ、ひいっ！ お尻っ！ はおう！ お尻があっ！」

「尻がよいか。尻がよくてたまらぬか。マイティナースススススよ、己が眼おのまなこでしかと見るのじゃ！ 己が尻で、我が魔法の杖を呑んでおるところをのう」

マイティナースは鱗の手で頭をつかまれ、ぐいとうつむかされた。角度的に黒いペニスを吞まされる肛門を直接見ることはできないが、蛇行する肉幹がズツズツと進み、自分の下半身の中に消えていくのがはつきりとわかる。その姿は男性器ではなく、獲物を呑む蛇そのもの。

「蛇が！」

マイティナースはわめいた。恐ろしすぎる光景に脳が痺れて、わめかずにはいられない。「蛇が、わたしのお尻の中に入ってる！ 入ってるう！ あっおとおおう！」

恐怖の叫びは、すぐに嬌声へと変化してしまう。蛇男根がうねって進むたびに、甘美な痺れが尻の中から背筋へと駆け上り、乳首絶頂で沸いた脳をまたグラグラと泡立たせる。

「いかに蛇に畏怖しようとも、いかに己が身を呪わしく感じようとも、尻から湧く悦びにはけっして勝てぬ。ススススススパーヒーローといえども、われが与える魔道の快樂には抗えぬのじゃ」

チロチロと踊る舌とともに吐かれる言葉は、マイティナースの身も心も縛り、蝕む呪詛に他ならない。ひと言ひと言が愉悅を強くしていく。

「いよいよじゃ。マイティナースススススススが聖なる母になるための我が毒を、淫らな尻にそそいで進ぜよう」

尻の肉悦に痺れる意識にも、忌まわしい言葉は鮮烈に突き刺さった。

「お尻の中に射精される！ いやあつ！ 絶対にいやあつ！ きひいいいいい！」

尻の奥の奥、もしかすると腸のなかばまで侵入した龟头が、ひときわ大きく身震いする。内臓そのものをかき混ぜられているような異界の快感が、尻から腹まで重厚に渦巻いた。

ドビュッ！ ジュビュバア！ ビュルルルルウウ！

腹の中で流れる水流の音色が、明確に聞こえた気がする。冷たい粘液が吹雪となって腹の中を一気に凍えさせるとともに、猛烈なエクスタシーが全身を吹き飛ばす。

「イクッ！ イクうううッ！ 冷たいっ！ お尻がイクッ！ 冷たいいいっ！ おなかがいッちゃふうう！ イクイクイクッ——ううッッッ!!」

絶頂の叫びが途切れる前に、もうひとつの黒い亀頭がコスチュームにもう一箇所を穴を開けた。肉幹に大きく広げられた肛門のすぐ上で、たつぷりと愛蜜に濡れそぼった女肉の花が開花する。

「最後の施術じゃ。生まれ変わるための快楽を存分に堪能ススススススするがよからう」
肛門から腸の奥まで入っている生きた魔法の杖が引き抜かれる、とマイティナーズは思っていた。だが射精を終えた蛇ペニスは尻の中から動こうとしない。それなのに肉褻がもう一本の魔杖に掻き分けられて、亀頭の先端が膣口に押しつけられる。

自分の間違いに気づいて、悲鳴をほとばしらせた。

「だめええっ！ 同時なんて絶対に無理！」

選択権はなかった。処女を略奪されたばかりの秘孔が、再び無慈悲に侵略される。ゴールデンシエルに犯されたときの恐怖が体内に吹き荒ぶ^{すさ}。

「！」

再現された恐怖で喉が詰まった。

だが膣内をえぐられると、恐怖が一瞬で融解して、悦楽の洪水が逆巻く。

「あっおおう！ 冷たくて、蕩けるうう！ 気持ちいいいいいい！」

またエンシエントポイズンの手で頭を下げられて、黒い肉幹が右に左にくねって女性器の中に這い進んでいく姿を見せつけられると、快感がさらに増大した。

膣に潜りこむ蛇ペニスの下では、肛門に入っている肉の杖もまた蛇行している。縦に並んだ奇怪な男根の動きは、そのままマイティナーズの体内につづいている。

「二本もっ！ ふああああ、二本も、あっんん！ わたしの中に、オチンチンが二本も入ってるううっ！」

薄い膜を挟んで、亀頭と亀頭、肉棒と肉棒がギチギチと摩擦し合い、新人スーパーヒーローを悩乱させる。こんな悦びがあるなど、想像したこともない。悪党たちに捕まらなければ、一生知ることにはなかっただろう。

「最後の毒をそそいでやろう」

拒否はできない。拒否を意識に上らせることすらできなかった。前後の肉穴の奥深くから未知の喜びを掘り返されて、もはやまともに思考することすらかなわない。

思考停止した官能の大波の中で、膣と腸の奥に同時に冷たい魔毒精液をぶちまけられる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

正義のスーパーヒーローチームの原点!

二次元ドリームノベルズ

サンダー グループス!

淫獄の四天使

小説：羽沢向一

挿絵：カワギシケイタロウ

全国書店、各電子書籍サイトにて好評発売中!



シリーズ作品の電子書籍版も好評配信中!

正義のスーパヒーローチームが帰ってきた!

二次元ドリームパルス

サニタークラップス!

リボーン シリーズ

THUNDER CLAPSI REBORN

羽沢向一 挿絵：緑木 豊



各電子書籍サイトにて
各巻好評発売中!